

「鹿島ふるさと探訪～水でめぐる浜～」

日 時：令和元年 11 月 28 日

講 師：高橋 研一

(鹿島市民図書館学芸員)

《鹿島ふるさと探訪開催にあたって》

エイブルと鹿島市民図書館では、床の間コーナーにおいて、鹿島6地区を1年に1地区ずつ取り上げて展示する「かしま再発見」展を開催しています。水を中心に地域における人々の生活・歴史・文化を見直していこうというのが「かしま再発見」の趣旨です。今年度は浜地区の展示を計画しており、その関連企画として、本日は浜地区の水に関する史蹟をめぐることにしています。

《浜地区を流れる河川・水路》

浜地区をめぐる際に考えたのは、「浜の繁栄はどのように築かれてきたのか？」ということです。浜地区は江戸時代から酒の街として広く知られ、現在でも毎年春に開かれる酒蔵まつりは多くの観光客で溢れています。浜の繁栄を象徴する酒ですが、酒造りは米と水によって支えられています。米作りも水が無ければできません。人々がちゃんと食べられるようにならないと、酒造りにまわせる米は出てこないわけで、どこでその米が出てきたかを考えないと、浜の歴史の根幹がわからないのではないのでしょうか。

そこで注目するのが、浜地区にどのように水が流れ込んでいるのかです。浜地区の河川といえば、浜川をすぐに思い浮かべると思います。浜川は、多良岳に源流を持ち、浜地区を貫流しています。しかし、浜川の本流が浜地区に入るころには、標高が低くなっているため、本流から直接取水して、利用できる地域は限られています。さらに、海水が遡上してくるため、浜川の利用にはさまざまな制限がありました。

また、山間部に目を移すと、湧き水に頼るしかないと、安定的に水を確保することができず、農業の発展がいちじるしく制限されていました。

そうした状況を大きく変えたのが、浜川上流で取水する嶽水道の開削と上下のふたつか



浜の山間部を流れる水路

らなる鮎越堤の築造でした。鹿島藩は延宝6年（1678）に鮎越下堤を造築し、天和元年（1681）暮から同2年春にかけて嶽水道を開削しました。これによって、鮎越の開墾が進み、新たに鮎越村が成立します。さらに、鮎越堤の下流に菅原堤・黒岩堤・石舟堤が相次いで築かれます。

菅原堤は鮎越下堤から流れる水を溜めるための堤で、野畠区の農業を支えています。菅原堤から流れ下る水路は、下流域では多々良川と呼ばれ、松岡神社・泰智寺の前を流れ、浜川に合流します。

黒岩堤は鮎越上堤から流れる水を溜めるための堤です。黒岩堤が築かれた年代は不明ですが、少なくとも享保9年（1724）以前にはできています。黒岩堤の完成により、山間部の開墾が進み、湯ノ峰村が成立しました。湯ノ峰の開発によって、米の増産が進み、有明海沿岸部の干拓と合わさって、人々の生活を十分に維持できる米が確保でき、酒造りにまわせる米ができたのではないのでしょうか。昭和戦前期においても、黒岩堤は、湯ノ峰区と新方区の農業を支える浜地区でもっとも重要な堤に位置づけられています。



黒岩堤

石舟堤も、鮎越上堤から流れる水を溜めるための堤です。黒岩堤からの水路が湯ノ峰山の西側を通るのに対し、石舟堤からの水路は東側を通り、新方区に流れていきます。

このように、浜の人々の命と生活は、浜川の本流と、浜川上流で取水され、山間部を流れてくる水路によって支えられてきたのです。

このように、浜の人々の命と生活は、浜川の本流と、浜川上流で取水され、山間部を流れてくる水路によって支えられてきたのです。

《松岡神社》

菅原堤から流れ下る小さな川は多々良川と呼ばれています。この多々良川のほとりに鎮座するのが松岡神社です。

松岡神社は浜の鎮守社として、古くから浜地区の人々の篤い信仰を集めてきました。毎年7月に行われる祇園祭は浜を代表する祭礼として知られています。

松岡神社の祭礼が祇園祭なのは、松岡神社がもともと祇園社だったからです。中世に入ると、全国各地で武士が地域の支配者として台頭します。浜地区では、大村氏が強い影響力を持ち、祇園社（松岡神社）を庇護していました。



松岡神社

近世に入ると、浜地区は鹿島藩の領域となります。そして、鹿島藩の4代藩主鍋島直條（1655～1705）は、祇園社を松岡神社と改称し、祇園祭神幸を再興します。さらに、下宮を今松社から若宮社（大村方区）に改めました。現在、私達が目にする松岡神社の“かたち”は直條によって再興されたものなのです。

ちなみに、直條は能古見の蔵王神社を三嶽神社に、北鹿島の五ノ宮神社を護国神社に改称し、五ノ宮神社・琴路神社の祭礼を復興するなど、鹿島の各地域の中核となる神社の名前を変え、新しい縁起を創り、祭礼を再興しています。父である3代藩主直朝が山間部・沿岸部の開発を進めており、直條の治世では、人々の生活が次第に安定してきていました。そうした中で、直條は神社を通じた地域の統合を模索していたと考えられます。

なお、江戸時代の松岡神社は浜地区と七浦地区の宗廟と位置づけられていました。明治維新後、新しい地方自治体として村が設置されると、七浦地区は松岡神社の氏子圏から離れていきます。

松岡神社の拝殿には、数多くの絵馬が奉納されています。そして、拝殿を囲むように、三十六歌仙絵額が奉納されています。三十六歌仙とは柿本人麻呂をはじめとする和歌の名手のことです。和歌にはさまざまな災いを取り除く力があると信じられており、古くからさまざまな祈りを和歌に込めて、神社に奉納してきました。額の上には和歌が書かれていて、下部には歌仙の絵、そして絵の左右に奉納した人と年が記されています。もともとは36枚あったはずですが、一部失われ、現在は33枚が残っています。



松岡神社拝殿の説明

奉納した人達をみていくと、すべて浜地区の人々です。奉納された歌仙額は、1枚ごとに奉納者が異なっており、個人で奉納した額もあれば（「中島久右衛門」）、村全体で奉納した額もあります（「湯ノ峰村中」「新方中」）。中には、女性が一人で奉納した額もあります。

これらの歌仙額は安政2年（1855）から翌3年にかけて奉納されています。この頃がどのような時代だったかという点、嘉永6年（1853）にペリーが来航し、翌安政元年には日米和親条約が締結されるなど、次第に世情が騒然としはじめていました。こうした中、浜の人々は、地域の安寧を祈り、奉納したものと考えられます。

すがつつじんじゃ 《清筒神社》

みなさんが神社に参拝された際、メインとなる大きな本殿の周囲に、小さな社殿があることを目にしたことがあるかと思います。こうした小さな社殿は摂社、あるいは末社と呼ばれます。松岡神社の本殿の左右にも、摂社である今松神社と清筒神社の社殿があります。

清筒神社は松岡神社の復興に尽力した4代藩主直條を祀る神社です。直條は和歌や漢詩文といった文事の振興に力を入れ、「楓園家塵」と呼ばれる膨大な草稿群を遺しています。その直條を追慕していた孫の6代藩主直郷は、元文5年（1740）に神道の師である岡田磐斎（正利）に依頼し、直條に神号「清筒霊神」を賜ります。そして、寛保3年（1743）に松岡神社内に清筒神社を創建して、直條を祀りました。これは松岡神社の復興に尽力した

直條の功績を讃えるためでした。その後、直郷は毎年、清筒神社に直條を追慕した和歌を奉納しています。

鹿島藩主個人を祀る神社としては、直朝を祀る思瓊神社がよく知られています。思瓊神社は天保13年（1842）に創建された広平のもので、清筒神社は、鹿島藩主個人を祀るもっとも古い神社なのです。

《浜皿山》

多良岳オレンジ海道（オレンジロード）に面した小さな神社が歓喜神社です。この神社は、近代の浜の大商人だった倉崎喜作が創建したもので、喜作が「歓喜」と号していたことから、歓喜神社と名付けられました。

歓喜神社の向かいに広がるのが浜の皿山跡です。鹿島藩は享保6年（1721）、浜の一騎峠に焼き物を製造するため、皿山を建設します。浜皿山は幾度となく、廃絶と再興を繰り返し、浜を代表する産物となりますが、戦時中に廃絶しました。

佐賀藩は有田皿山に代官所を設け、陶工を厳しく管理していました。有田の皿山代官の記録には、鹿島藩が密かに有田から陶工を招き、浜皿山での焼き物生産にあたらせていたことが発覚した記述があります。皿山の集落に立つと、周囲を山で取り込まれているため、内部を監視しやすいし、外部からも隔離されている地形であることがよくわかります。鹿島藩は、こうした場所で、焼き物の生産を行っていたのです。

この浜皿山での窯業を支えていたのも、水でした。江戸時代には、黒岩堤から流れ下る水路に水唐臼が設けられていました。この水唐臼は浜皿山で使用するための焼き物用の土を製造するためのものでした。この土地に皿山が設けられたのは、人目に触れにくく、かつ水が十分に確保できるためだったのではないかと推測されます。



皿山風景

しちろうみや 《七良宮》

皿山を小川に沿って下っていくと、七良宮にたどり着きます。この小川は浜川上流域で取水され、嶽水道・鮎越上堤を経て、石舟堤から流れ下ってきたものです。

拝殿にある扁額には「七郎宮」と記されており、かつては七郎宮と書かれていました。しかし、次第に、「郎」の漢字の右側が省略され、「良」と書かれるようになりました。そのため、「七良宮」と表記するけれど、読みは「しちろうみや」のままになっています。



七良宮

この七良宮がある区は新方区です。江戸時代には、開浦村(啓浦村)と呼ばれていました。七良宮の前に一段低くなっている田地がありますが、かつてはここが陸と海の境界線でした。寛永14年(1637)に島原の乱が起こると、鹿島藩の重臣田中安心が藩主に代わり、鹿島藩兵を率いて出陣します。その際、安心は、この地で祈りを捧げ、無事に帰還することができたことから、「運が開ける浦」、すなわち開浦と名付けられたと伝えられています。それ以来、この近辺を往来する旅人は参詣して、道中の安全を祈ってきました。

七良宮の鳥居は延宝2年(1674)に造立されており、七良宮はそれ以前に創建されていました。扁額を書いたのは、3代藩主直朝の長男で、普明寺を開いた断橋和尚です。病弱だった断橋和尚は、宝永5年(1708)に開浦に天開図画亭という建物を創り、宝永7年には移り住みます。潮風を受け暖かい風光明媚な開浦で養生していたのでしょう。正徳5年(1715)に天開図画亭で亡くなっています。天開図画亭があった場所をはっきりしていませんが、おそらく七良宮の背後にそびえる山腹にあったのではないのでしょうか。

現在でも、七良宮では、浜の祇園祭の際には重要な神事が行われており、松岡神社とならぶ浜地区の重要な神社です。

《臥竜ヶ岡公園と事比羅神社》

浜地区の前面に広がる有明海は、豊かな海の幸を地域の人々にもたらしてきました。その有明海を一望できるのが臥竜ヶ岡公園です。臥竜ヶ岡公園は浜地区の人々の集会所としての役割を果たし、また定時に鐘を鳴らす鐘撞堂があるなど、浜地区の人々の生活と密接なつながりをもっていました。

臥竜ヶ岡公園は、江戸時代の史料では「城上」と表現されています。城の存在は同時代史料では確認できませんが、城跡のような景観から、その名が浸透していったものと推測されます。

江戸時代、「城上」には泰智寺が管理する観音堂や事比羅社がありました。観音様は船の護り神としても知られているので、浜に出入りする船を護るための観音様が祀られていたのでしょうか。事比羅社は讃岐国(香川県)の金刀比羅宮を勧請したもので、永禄元年(1558)に鹿島を支配していた有馬義貞が勧請したとの伝承があります。事比羅社も海上の安全を祈る神様です。海を眺める「城上」は浜の人々の海での安全を祈る場所だったのです。その後、明治維新の廃仏毀釈で、観音堂が泰智寺に引き取られ、事比羅社だけが残りました。

それでは、なぜ神社だった場所が公園になったのでしょうか。それは、大正4年(1915)に八本木村が大正天皇即位記念事業として、公園を整備したためです。公園は浜公園(臥竜ヶ岡公園)と名付けられ、桜や紅葉が咲き誇る浜の名所として親しまれます。

公園内には、漢詩や俳句を刻んだ歌碑がいくつも建てられています。この石碑は、浜の繁栄を詠んだ古賀精里と草場佩川の漢詩を刻んだものです。臥竜ヶ岡公園が整備されたこと



臥竜ヶ岡公園

を記念して、大正5年に建てられました。このうち、草場佩川の漢詩は文化5年(1808)に諫早からの帰路で詠まれたものです。また、この芭蕉の句が刻まれた石碑は、さきほどの歓喜神社を創建した倉崎喜作が大正9年に建てたものです。近代の浜地区では、錦水吟社という俳句の結社があり、盛んに句会が催されていました。倉崎喜作は錦水吟社の中心的なメンバーでした。このように、臥竜ヶ岡公園は浜の文事を顕彰し、長く後世に伝える役割も担っていたのです。

《泰智寺》

鮎越から菅原堤を経て流れ下ってくるのが多々良川です。その多々良川が浜川に再び合流する直前の場所にあるのが泰智寺です。多々良川を渡ると、立派な山門があります。山門をくぐると、本堂があり、本堂の背後には臥竜ヶ岡公園がある山が迫っています。

この川と山に挟まれた美しい景観に惚れ込んだのが、初代鹿島藩主鍋島忠茂です。いま泰智寺がある場所には、もともと知恩寺がありました。知恩寺は、鎌倉時代に浄土宗の学僧だった聖達が創建した寺院で、聖達は時宗の開祖一遍の師として知られています。忠茂は亡くなった妻の墓を建てる場所を探して、領内を廻った際、知恩寺が立地する景観に惚れ込みます。忠茂の真意を悟った知恩寺は、境内地を譲り、立ち退きます。そして、忠茂はここに妻の菩提を弔うための隆心寺を創建しました。その後、忠茂が亡くなると、忠茂の跡を継いだ2代藩主正茂は、隆心寺に忠茂の遺骨を分骨するとともに、寺の名前を泰智寺と改めました。

鹿島鍋島家の菩提寺といわれると、普明寺を思い出される方が多いかと思います。もともと初代藩主忠茂が創建した菩提寺は泰智寺です。泰智寺は曹洞宗の寺院です。その後、中国から黄檗宗が伝来すると、3代藩主直朝が黄檗宗寺院として普明寺を創建し、菩提寺とします。ただ、泰智寺には御遺髪が納められ、墓石が建てられるなど、藩政期を通じて、「両御寺」と称され、高い寺格を誇っていました。また、泰智寺の広大な境内の中には、幕末維新期に鹿島藩主直彬を支えて活躍した原忠順や八沢棟之進の墓もあり、鹿島藩の歴史を考える上で、重要な場所です。

泰智寺の本堂に入ると、正面には釈迦如来が御本尊として祀られています。左の方には、鹿島市の指定重要文化財となっている頂相(ちんぞう)と16体の羅漢像が安置されています。

さらに奥に進むと、鹿島藩歴代藩主と泰智寺歴代住職の位牌が安置されています。ここに万仞道坦(ばんじんどうたん)の御位牌があります。万仞道坦は元禄11年(1698)に大村方の池田家に生まれました。曹洞僧として学問に励み、延享3年(1746)には故郷の泰智寺の12代住職になっています。その後も、全国各地の曹洞宗寺院の住職を歴任し、安永4年(1775)に三河国(現在の愛知県)で亡くなりま



本堂で説明を聞く参加者

した。万仞道坦は近世曹洞宗を代表する学僧として、全国的に知られています。生涯を通じて、30を超える著作があり、明治時代になっても再版をされるなど、曹洞宗の学問上で重要な功績を遺しています。

《岩岡籠》

山間部の開墾とともに、浜地区に豊かな収穫をもたらしたのが有明海沿岸部の干拓です。干拓地の周囲は海水で囲まれているため、直接水を取水することはできません。海水が混じらない地点で取水して、水路を引かなければなりません。例えば、南舟津区の干拓地には、黒岩堤と石舟堤の水が流れ込み、耕作を支えていました。干拓地の農業も、浜川とそこから取水された水路によって支えられてきたのです。

浜地区でもっとも古い干拓は、さきほど七良宮の前にあった小寺籠で、寛文10年(1670)に完成しています。その後、有明海に向かって、昭和期に至るまで、相次いで干拓が行われ、耕地が拡大してきました。

干拓は鱗状に進められ、かつては内陸となった干拓地にも堤防が残っていました。しかし、耕地整理や圃場整備によって、ほとんどが取り壊されています。浜地区と同じく干拓が行われた北鹿島地区や大字重ノ木地区には、堤防の痕跡は遺されていません。しかし、浜地区では、南舟津区と北舟津区にかつての堤防が遺されています。

北舟津区に遺る明治期に修築された岩岡堤防もそのひとつです。岩岡堤防は、かつて岩岡籠と呼ばれていた干拓地を築くために設けられた堤防です。岩岡籠は、当初は福島籠と呼ばれていました。享保2年(1717)に福島籠が高潮の被害を受けた記録があり、それ以前に築かれていました。その後、高潮などによる破壊と再築が繰り返され、天明2年(1782)に再築された福嶋籠を岩岡籠と改称します。

明治期でも、海水の浸入を防ぐためのもっとも重要な堤防と位置づけられています。現在は、岩岡堤防の先にも耕地が続いています。これは戦後の干拓によって、昭和45年(1970)に完成した浜干拓(協和籠)です。浜干拓の完成によって、岩岡堤防はその役割を終えましたが、現在でも浜地区の人々の命と土地を守り続けた立派な姿を見ることができます。

本日はバスツアーに参加いただきありがとうございました。



江戸時代の浜地区の干拓

(『鹿島市史中巻』)



岩岡堤防(ガードレールの左側)